

【今週の注目疾患】

【麻疹】

2019年第8週に県内医療機関から2例の麻疹の届出があった。1例は発症前に海外渡航歴のある輸入症例と推察される症例であり、1例は第7週に届出のあった先行事例の接触者である(表1)。

表1:2019年千葉県内の麻疹届出状況

No.	保健所	性別	年齢	病型	発症日	診断日	診断週	接種歴		遺伝子型	備考
								1回目(年齢)	2回目(年齢)		
1	野田	男	40歳代	麻疹(検査診断例)	2月5日	2月12日	7週	有	不明	D8	渡航・滞在先(ラオス・タイ)
2	印旛	男	10歳代	麻疹(検査診断例)	2月5日	2月12日	7週	不明	不明	D8	渡航・滞在先(ベトナム)
3	市原	女	40歳代	麻疹(検査診断例)	2月5日	2月14日	7週	不明	不明	B3	渡航・滞在先(フィリピン)
4	市原	男	40歳代	麻疹(検査診断例)	2月14日	2月17日	7週	不明	不明	B3	No.3の家族、渡航・滞在先(フィリピン)、国内で家族内感染と推察
5	市川	男	10歳未満	麻疹(検査診断例)	2月17日	2月22日	8週	無	無	D8	渡航・滞在先(ベトナム)
6	安房	男	30歳代	修飾麻疹(検査診断例)	2月23日	2月24日	8週	有	2 無	B3	No.3の接触者

なお、2019年第1～8週までの累計は6例であるが、既に第9週(集計対象:2019年2月25日～3月3日診断例)に2例の麻疹の届出を認めている(2月27日現在)。[【関連ページ:千葉県疾病対策課】](#)

麻疹は発熱、咳、鼻水や結膜充血などのカタル症状、発疹といった症状を特徴とし、中耳炎、肺炎や脳炎などが合併症として見られることがあり、麻疹は全年齢において深刻な病態を引き起しうる病気である。小児において、中耳炎は小児の患者10人に1人程度で起こり、場合によっては恒久的な聴力の低下を残すことがあり、肺炎はおよそ20例に1例の頻度で見られる。また、脳炎は小児の麻疹患者の1000例に1例の頻度で見られ、場合によっては聴覚障害や知的障害といった後遺症の発生が知られている。麻疹による死亡は先進国でも1000例に1～2例と少なくなく、発展途上国での致命率は3～5%におよぶことがある。また極めて稀ではあるが、感染から7～10年経過後に発症する亜急性硬化性全脳炎も麻疹の合併症として知られる。

麻疹はワクチンにより感染リスクを最小限に抑えることが可能であり、小児期の定期接種の機会に、確実に予防接種を受けることが重要である。また予防接種歴が無い、もしくは不明な場合はかかりつけ医と相談の上、麻疹含有ワクチン接種の検討と、特に海外への渡航を計画している方、医療従事者、保育関係者、教育関係者、不特定多数の人と接触する職業に従事する方には確実な予防接種が推奨される。

参考・引用

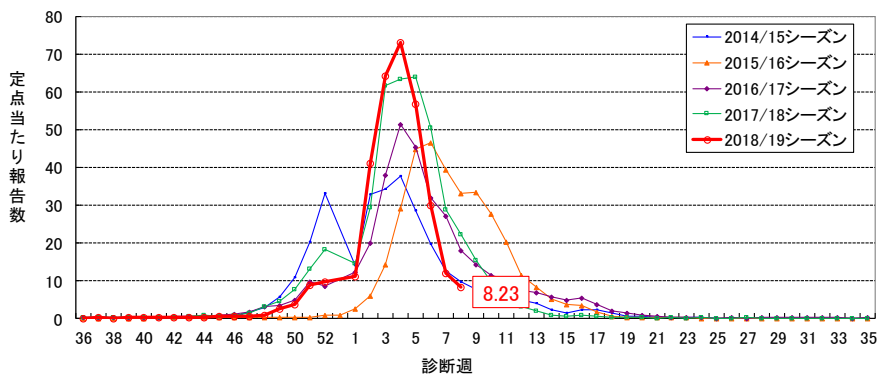
米国CDC: Complications of Measles

<https://www.cdc.gov/measles/about/complications.html>

【インフルエンザ】

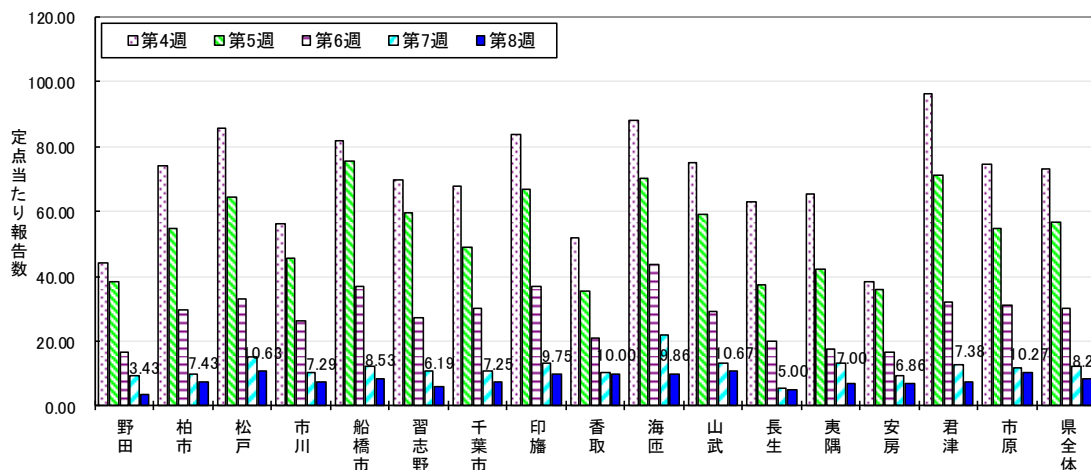
2019年第8週に県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数は、定点当たり8.23（人）であった（図1）。

図1: 県内定点医療機関から報告されたインフルエンザの定点当たり報告数の推移（シーズン別）



県内16保健所管内全てにおいて、前週より定点当たり報告数は減少した。報告の多い上位3保健所管内とその定点当たり報告数は、山武保健所（10.67）、松戸保健所（10.63）、市原保健所（10.27）であった（図2）。

図2: 直近5週のインフルエンザの定点当たり報告数の推移(保健所別)



2019年第8週の小児科・インフルエンザ定点医療機関の協力による迅速診断結果の報告は、1,638例中A型1,557例（95.1%）、B型73例（4.5%）、A and B型0例（0.0%）、A or B型8例（0.5%）であった。